
狩獵物語

ゴルゴダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩獵物語

【Zコード】

Z2091BA

【作者名】

ゴルゴダ

【あらすじ】

森の中で目を覚ますと、獣の姿になっていた。見た目肉食獣な臆病な人間の心を持つ、そんな獣の物語。
テンプレなお話をを目指したいです。小説初心者で、稚拙な文になりますが読んで頂けると嬉しいです。

プロローグ

一体、どうじうじこと何だらひ……。

何度も考えてても答えは出ない。それでも、考えずにはいられなかつた。目が覚めたとき、目に映るのは青々とした草木だった。森の中なのだろう、見渡す限りに生い茂つている。

何故、自分は森の中にいるのだろう……と、そう考えたとき、自分が何なのかが分からなかつた。常識……と言えば良いのだろうか、森や草などについては分かる。此処が何処なのか、何故いるのかは分からぬいが、森の中にいる、と言う現状だけは理解できる。

だが、自分が何なのか？ と言つと疑問には答えられない。それでも、どうにか記憶を探り続け、自分が人間だとは思い出すことができた。だが、やはり此処が何処なのか、何故いるのかは分からなかつた……。

暫く考えてみても、何も思い出せない。とりあえず、喉が渴きを訴え始めたので、水を捜すことにして、耳を澄ませば、水が流れる音がする。その音に向かつて行く。

ズシンッ！ ズシンッ！

何故だろうか？ 一步を踏み出す度に、地面が軽く震える。それに、心なしか視線が高い気がする。

記憶が無いため自信が無いが、人間が歩くだけでは地面は震えないと思う。それに……人間は四つん這いで動く物だつただろうか？ 嫌な予感がする。その予感が何なのかも分からぬ。視線を下に向け、地面を踏み締める手を見る。……そこには確かに手が在つた。

だが、自分が想像していた手ではなかつた。

腕は黄色つぼい鱗のような物に覆われていた。先の方は鋭利な刃物を思わせる鋭い爪が生えている。そのまま一の腕に視線を上げていくと、肘の部分には真っ白な毛が生えている。その毛より上は青い……いや、蒼い鱗に覆われていた。

頭が動かない。何だこれは？　自分の中の常識では、人間はこんな腕はしてはいない筈である。

だが、今、自分の目に映る腕は鱗に覆われた姿を見せている。

怖い。そう思つてしまるのは仕方がないだろう。目を覚ましたら見知らぬ場所にいた。更に自分の常識では有り得ない姿に自分が成つてしまつてしているのだ。これで恐怖を覚えない筈がない。少なくとも、自分は恐怖している。

あれから暫く、自分の身体を観察してみたが、見える範囲は全て蒼と黄の鱗に覆わっていた。四肢には鋭利な爪が生えそろい、更に尻尾まで生えていた。自分に尻尾があることが信じられなかつたが、下半身に力を込めるときこくと動いた。認めたくないが、やはり自分の尻尾らしい。尻尾も黄色の鱗に覆われており、やけに刺々しかつた。

更に暫く身体を動かしていたが、再び喉が渴きを訴え始めたので、今度こそ水が流れる場所に向かつた。

ズシンツ！　ズシンツ！

地面を震わせながら、水のある場所までたどり着いた。小川だつたらしく、木々の隙間から差し込む日の光を受け、キラキラと輝いている。その美しさに少しだけ感動しながらも、水を飲もうと水面に顔を近付ける……。

自分の身体を確認したときから分かつてはいた。それでも、やはりショックを受けた。

水面に映る自分の顔は獣の顔だった。大きく裂けた口からは鋭い牙が生えている。その口の裂け目から下半分は黄色い鱗に覆われ、上半分は蒼い鱗に覆われている。本来は見る物全てに恐怖を刻み込むだろう一つの瞳は、今は深い哀しみを帯びている。そして蒼い鱗に覆われた頭からは一本の黄色っぽい角が生えていた。

もはや、納得するしかないだろう。自分が人間ではなく、獣であると……。

獣の本能、人の理性

あれから暫くの間、茫然としていたが空腹から行動しなければならなかつた。

獸とはいえ、……いや、獸だからこそ食欲と言つ欲求には逆らえなかつた。とりあえず、水で少しでも空腹を誤魔化し、その間に食べ物を探すことにした。

……踏み込めば爪が届くだらう距離まで近づけた。この獸の身体で腕を振るい、爪で切り付ければ殺せるだらう。

そう……、振るえばいい。振るうだけでいいのに、身體が動かない……。早くしなければ逃げられてしまつ！ 仕留めろ！ と獸の本能が叫ぶ。でも、動けない。この身體では可笑しいのかもしない。それでも、人間としての理性が生き物を殺すことを怖がつてゐる。人間では無い、獸の姿なのに……。なのに、心は人として存在する。酷く歪で滑稽である。

「グルルウ……」

自嘲するかのように喉が鳴る。その唸るような声で丸い鳥はこちに気づいてしまつた。

びっくりしたように一鳴きすると、丸い身體を左右に揺らしながら、

ボテボテと逃げていく。

……とても追い掛けの気にはなれなかつた。追い掛けでも、きっと自分は殺せないだろ？。きっとまた、殺すことに恐怖して動けない筈だ。

「グルルウ……」

項垂れる自分の喉がもう一度鳴る。今度は自嘲の他に、水で誤魔化した空腹感が主張するかのようだ……。

お腹が空いたな……。

獲物を殺せないのなら、何か木の実やキノコでも探そつか……。見た目は肉食獸にしか見えないので、草食か……。氣落ちしながらも探しに行こうと項垂れていた頭を上げる。

と、やつきました丸い鳥がいた場所に、白くて丸い物が落ちている。

何だろうか……？

近づいて見ると、それは卵だった。何故落ちているかは分からないが、今は素直に喜んだ。草食を覚悟していた自分にとつて、貴重な肉だ。厳密には肉とは言えないかも知れないが……。

とりあえず、今日はこれを食べよう！……少しだけ、気持ちが上向きになれた。

その後、数日の間、あの丸い鳥を観察していたところ、幾つか分かつことがある。

まず、あの丸い鳥は飛べないらしい。何度かこちりに気づき、驚い

て逃げる際に、一度も飛ばなかつたからだ。……あの羽根は飾りなのだろうか？ 逃げ方は必ず地面を走っていた。……走るのも遅く、ボテボテと走つていた。試しに追い掛けでみたら、余裕で追い付いた。……何だろうか。やるせなさを感じた。

次に気づいたのは卵についてだ。脅かすつもりはないが、こちらは見た目だけは肉食獣である。大きさも数倍は有るだろう。そんな獣が近くにいたら、それはびっくりする筈だ。自分もこんな獣がいたら腰を抜かす。……まあ、自分がその獣だが……。

……閑話休題。

卵についてに戻るが、あの丸い鳥は驚いた際に卵を産み落とすらしい……。その事実を知つたこぢらが驚いた。……どれだけ驚いているのだろうか？ あの鳥たちは……。

最後に、丸い鳥たちの生息域についてだが、これは分かりにくい。この森の中の殆どの場所で見かけるからだ。少なくとも、この森の中全域では生息しているのだろう。卵には困らないから、そっちの方が嬉しいが……。

卵以外にも、山の幸が豊富に手に入つたことも嬉しい。木の根元にはキノコが沢山生えていた。中々美味しかつたが、勿論毒キノコ等もあつた。

普通に気分が悪くなり体力が落ちるようなキノコや、眠気を促すキノコ。身体が痺れて動けなくキノコもあつた。……一番酷かつたのは、爆発するキノコだらう。口の中で爆発した時は軽くパニックになつた。

しかし、この獣の身体はかなり優れていたようで、抗体と言えば良いだろうか？ 抵抗力が備わるのが早く、最近 とは言つても、まだ目覚めて数日だが では気分も悪くならないし、痺れないしキノコによる眠気も無くなってきた。……爆発はするので、赤いキノコは食べない。

キノコ以外にも、食べられる草や蜂蜜も見つけることができた。

……相変わらず殺すこととは出来ないでいるけど、生きていけるようにはなった。でも、このままじゃ絶対にいけないだろう。自分のような肉食獣がいるのだ。他に個体がないとは思えない。同じ種族でなくとも、他の肉食獣だっているかも知れないだろうから……。

遭遇してしまったとき、どうなるか……。分かりきったことだ。

きっと…………殺される。

喰らう覚悟……。

殺す覚悟を決めなければ……。

生きていくために……。

捕食する者、される者

あれから更に数日が過ぎた。

相変わらず、卵と山の幸で腹を膨らませている。卵は脅かせば確實に産み落とすわけではないが、五羽脅かせば三個は大体手に入る。一日に最低でも三〇匹は見つけるので、どんなに少なくとも一〇個は手に入る。それに山の幸を合わせれば、意外に腹が満たされるのだ。

餌を求めて散策を繰り返すうちに気づいたのだが、此処は森の中と言つよりも渓谷と言つた方がいいようだ。

森を抜けると大きな滝が見える。更に散策範囲を広げると丘が見えて来た。丘の上から眺めると森よりも平野の方が目立つ。その平野も幾つかの滝に囲まれていて渓谷と呼んだ方がしっくりとくるからだ。

更に散策の際に気になる物を幾つか見つけた。一番高い丘の上に、ボロボロになつた蜂の巣箱と吊橋を見つけた。吊橋は残念だけど、この身体を支える程の強度はなさそうだから諦めた。吊橋の向こうに何か有つたかも知れないと思うと残念な気持ちで一杯だ。それに平野には壊れた小屋？のような物も在つた。この三つの人工物から、人間が近くで生活しているのかも知れない。吊橋以外は壊れているから、生活していたかもになるが……。

それから毎日脅かして、山の幸を集めてと何だかんだで生活出来ていたのだけど、最近渓谷の様子が可笑しい……。丸い鳥たちの数が減つている……。それに警戒心が強くなっている気がする。前までは大きく一步踏み込めば捕まえられるぐらいに近づいても、気づ

かれなかつたのに、最近はこちらの視界に映つた途端に逃げ出すようになつてゐる。

卵は落としていくからいいのだけれど……、やはり気になる。だけど、理由が分からぬ。そのうち分かるだろ？ と、楽観的に考えていたのが間違つたのだろうか？ 数日後に思い知らされることになつたのである。自分以外の肉食獣の存在を……。

今日の散策は滝の方にしようと考へて、滝に向かう。

ズシンッ！ ズシンッ！

地面を揺らす自分の歩みにも慣れはじめてきた。今まで試してなかつたけど、この獣の腕なら魚を取れるんじゃないだろうか？ と、考へてる。

魚は抵抗なさそうなのに、鳥は殺せないんだなあ。

獲物の大きさが関係しているんだろうか？ どうひりこしら、魚なら大丈夫か試してみないことには分からないか……。
考えながら滝に近づいて行く。

「ギャア！ ギャア！」

……えつ？

微かに聞こえた鳴き声。丸い鳥とは違う初めて聞く鳴き声。空耳じゃない……、この獣の身体は自分には勿体ない程に優れている……。体力や腕力は勿論、聴覚だって優れている。だから、聞き間違つこ

ではない。滝の音と共に、確かに聞こえた。

そして、その優れた身体は嗅覚も優れている。だから、嫌でも気づかれる……。

血の臭いに……。

その初めて見る生き物を茂みからそっと覗く。その生き物は一足歩行が出来るようで、器用に後ろ足で立っている。前足は未発達なが、後ろ足より大分小さい、だが、鋭利な爪は変わらないようで、前足にも後ろ足にも付いている。身体は橙色の鱗に覆われているが、顔と頭部、更に背中から尻尾までは線のように薄紫色の鱗になっている。口は鳥のくちばしのように尖り、その口からは鋭い牙がノコギリの刃のようにびっしりと並んでいる。大きく口を開けられるようになら、くちばしのような口は根元から大きく裂けている。そしてあれはトサカなのだろうか？いや、トサカと言つよりエリマキと言つべきだろうか。その大きさは顔全体の半分を占める程でかなり目立つ。

「ギャア！ ギャア！」

その生き物は七、八匹ぐらいで何かを貪つてゐる……。爪や牙が遠くからでも分かる程に真つ赤だ。舞い上がる羽根が、喰われている物が何なのかを物語つてゐる。

「ギャギヤアッ！」

「ギャツ！」

「ギャア！」

急に貪るのを止め、それぞれ鳴き出す。威嚇している感じではなく、歓迎しているという感じだ。

その鳴き声に応えるように、ゆっくりと奥から現れたのは、他の奴らよりも一回り大きい個体だった。爪も牙も更に鋭く、何よりエリマキがかなりの大きさである。大きさや他の奴らの態度から察するに、恐らくは奴らの群れのリーダーだろう。奴らの中心で悠然と構える姿は、その風格を現している。そのままリーダーも食り始める。

その初めて見る生き物と初めての捕食行動を、じっくり観察せずに直ぐに逃げれば良かつた。目の前で狩りが行われたと言うのに、愚かにも覗き続けたのがまずかつた。

「ギャアアー……」「ガアツ！？」

奴らのリーダーが食べ終わった直後の、遠吠えのような大きな鳴き声に、驚いて声を漏らしてしまった。

その漏らした声が小さからうと、狩りの後で血に酔い、高ぶつている奴らが反応しないわけがない。

直ぐに十数個の瞳がこちらを見る。こちらの姿を確認した奴らは、リーダーを先頭にこちらに近づいて来る……。

ゆっくりと囮むように近づいて来る奴らに対し、逃げようにも身体が動かない！ 恐怖に身体が竦んで動いてくれない。

恐怖に震えている内に、奴らに包囮された。いや、後ろは何故か空いている。前と左右だけに固まっている。

奴らはそれに威嚇の声を上げてくる。そのまま、自分は動けない……。身体の震えが止まらない。

……襲つて来ない？

包囲されて暫く経つた。いや、恐怖から時間を長く感じただけで、それほど時間は経つてはいないのかもしない。……。
相変わらず一定の距離を空け、こちらを威嚇するように吠え続ける。その威嚇の鳴き声を聞き続ける限り、身体の震えは止まりそうにない。

どうにかしたいが出来そうにない。……。何もして来ないとは言え、後方以外を取り囲まれ、威嚇され続けている状況。自分にもう少し勇気が有れば、吠え返し、追い払えるのかもしない。……。
自分の身体は奴らよりも一回り以上大きい。群れのリーダーと比べても自分が大きいのだ。

膠着状態が続く中、ふと、とある考えが頭を過ぎる。

……！ だからなのか……？

奴らが襲つて来ない理由……。奴らは数では当然、勝つている上に、相対している自分は怯えている。当然、奴らの方が狩る側だ。

……だが、それは怯えている自分の考え方だ。

奴らからすれば、見た目の恐ろしさと大きさだけなら、確かに自分たちよりも遙かに強暴そうに見えるのだろう。だから警戒し、威嚇の声を上げているのが限界なのかもしれない。

……勇気を出して、勢いよく吠えてみようか？ 一度だけ……、その一度だけで、奴らが自分を恐れて逃げていってくれるかもしねない。

大きな声で吠えようと、ゆっくりと息を吸い、身体に力を込める。
戦いになつたら、自分は絶対に負けるだろう。未だに他の生き物を殺せていないし、今までは、これからも殺せないだろう。そんな自分が奴らを蹴散らせるだなんて思えない。

だから吠えて、恐れさせて……、奴らに逃げていってもらおう。大丈夫……、只、一声鳴けば良いだけだ。

さあ！　吠えよう！

「グルウ　「グギャアアー！……！」

膠着状態を嫌つたのは自分だけじゃなかつた……。奴らのリーダーも痺れを切らせていたんだろう。

威嚇に参加していなかつたリーダーが咆哮した！　自分の決しの覚悟の声は搔き消され、勢いを失つた自分は奴の力強い鳴き声に恐れ、一步だけ『後ずさつて』しまつた……。

「ギャツ！　ギャツ！」

「ギャアア！」

後ずさると云う、明確な怯え。

その瞬間！　奴らの目の色が変わつた。強者と勘違いさせていたメツキが剥がれ、見かけ倒しの弱者が奴らの視界に映つている。

目の前にいるのは……獲物だと……！

一方的な蹂躪劇が幕を開けた。

群れの中の一匹、爪を振りかざして飛び掛かって来る！
にも、身体が完全に竦んで動かない！
逃げよう
鱗に覆われている筈の右肩に鋭い爪が突き刺さる！

「！」

声にならない悲鳴が口から零れる。この身体になつて初めて受ける明確な痛みに、無意識に身体が動き、後ろに跳ねる！

「ギヤッ？」その無意識の反応が、飛び掛かつて来たもう一体の攻撃から避けさせた。

……痛い！

どろりと血が溢れ出す感覚がする。奴らの前で右肩の傷に目を向けるわけにもいかず、奴らを視界に收め続ける。

「グギヤウ!?」

「グチュリ！」と何かを食いちぎるような音がした。刹那、左脇腹
が焼けるように痛み出す！ 何が起こったのかと目線を向けると、
いつの間にか奴らの一体が食いついていた……。

「ガアア！？」

食いつかれたことに混乱し、狂ったように暴れる。

余りの暴れよう、食いついていた奴が吹き飛ぶ！更に回りを囮んでいた奴らも警戒し、距離を取る。

に、逃げないと!!

逃避の一択しか頭にはなかつた……。何処でも良いから逃げたかつた。振り返り痛む身体に力を込めて、少しでもこの場から離れたかつた……。

「グギヤアーオ!!!」

だけど……背中を向けて逃げるような隙を、奴らが見逃す筈がなく……。

背後から、奴らの中でも一際大きな気配を放つ個体が背中に向かって飛び掛かつて来るのを感じた……。

「ガア！？ グウウ……」

背中に重量感の有る衝撃が当たつた直後！ ピシピシ、パキパキと言つ音と共に視界がぶれる……。
ぶれたと思ったら、地面が近づいて来た。……いや、自分が倒れようとしているのだろう、身体が崩れ落ちるのを感じた。
僅かに開いた瞳の先を、蒼い破片が降り注ぐ。

何処かで見たことの有る色……だな。ああ、……自分の鱗と同じ色だ……、破片つことは……、砕かれたんだ……。

背中からじくじくと夥しい量の液体が溢れ、流れ出すの感じる。

微かに奴らの鳴き声が聞こえる。理性はもう諦めている。自分は此処で死ぬんだと、理解し悟りてしまつ。

この身体になつて……、何も分からぬまま、何も出来ぬまま、死んでしまうのか……。

もう、身体を動かす気力もない……。目も開けていられない……。ゆつくりと……視界が暗くなつていく。

完全に閉じる寸前、諦めた理性とは別に、本能が身体を震わせるのを確かに感じた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2091ba/>

狩獵物語

2012年1月5日22時51分発行